

特260

932

鸚鵡小所
辛都婆小所
閨寺小所
捨垣
伯母棄

井
下

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

始



第260

932

坂戸金剛拾
九代右近氏
但遺稿據二
拾三代右京
氏慧心鈔校

鸚鵡小町

梗概

(所) 近江國関寺辺

(季) 三月

かつて殿上にありて一世に時めきし小野小町は、今は百年の姥となり見る影もなく老瘁して関寺辺にさすらひぬけり。帝憐みの歌を下しければ、新

大納言行家勅命を奉じて尋ね行き、かくと小町に告げぬ。小町喜びて拝見

せんとすれど老眼にてさだかに文字も見えねば読み上げて賜はれと乞ふ。行

家御製を取り上げ、雲の上はありし昔に變らねど見し玉だれの内やゆかし

き」と讀みて聞かせければ、小町つくづくと承りしが、やがて唯一字にて返歌を奉

べしとて、歌の六義より語り起し、鸚鵡返しのことなど態に説き、「内やゆかしき」

を「内そゆかしき」と、「や」を「ぞ」にかへて奉らんこれこそ即ち鸚鵡返しよ

とて種々歌の道につき物語り、業平の玉津島にて舞ひし法樂の舞にならひてまひ

などしてありしが、日の暮れゆく頃立別れけりと。



鸚鵡小町 (三番目)

役別	装束附
シテ 小野小町	面老女 袷髪 髪帯 着付指箱 腰巻達指 腰帯 水衣 笠 (物着予黒風折 長絹 扇)
ワキ 新大納言 行家	黒風折烏帽子 着付厚板 白大口 狩衣 腰帯 扇 懐紙

作物 杖

鸚鵡小町

柳^ヲ是^ハ陽成院^ニ住^ハ新
大納言^ノ家^ニ住^ル也。我^ガ君
変^ハ道^ノ心^ヲ無^ク著^ク
奇^ヲ撰^ゼられ^ル也。御^心に^付ふ
歌^ナす。爰^ニ出^羽の^羽司^小聖^ノ

良実が娘よ小野の小町彼は双び
なれたおれよよふてゆく今百幸の
姥とあり関寺もよは在よ一室は
及たれおれをとりたれよとせよ
ありまを称て類を下にづーとの
室はよはと今関寺も小野の

小町の方とよき
我は海をらま川坂や四の宮河系
四の過い川はさといの街ならん
昔は美美容の花たりし身あれば
今ハ藜藜の草となるを
憔悴と表へ膚ハ凍梨れなるの

セウス井

オトロ

ハダ

トウ

梨

娘。杖突なうらで。方なう人。
恨。身をかこち。泣い。川。笑。お。川。
安。うら。祢。バ。物。狂。ひと。人。を。い。ふ。
さ。う。と。して。は。捨。て。ぬ。命。は。身。は。遠。し。と。
く。身。は。流。く。も。髪。か。ら。う。ら。う。と。さ。ぶ。
那。ら。う。と。昔。哉。さ。う。言。ふ。悲。び。様。の。

上
夏。の。涼。覚。の。も。た。た。敷。を。飽。果。た。り。か。
我。は。く。い。ふ。是。を。成。る。所。
に。て。有。り。身。を。ま。れ。の。ま。の。よ。く。ま。て。
海。も。ま。り。が。小。町。と。承。り。ゆ。が。何。事。
ふ。く。れ。そ。扱。け。程。い。い。く。を。
任。家。と。定。め。ま。る。そ。誰。と。も。む。

とくなきれを時園寺に日教を
 送りゆ コカ 実の美ちの流石を
 からびて園寺の面白た在也
 前に牛馬の毎の路あり
 美まもゆを候し コカ ともた
 後よ コカ 雲發の山さうして コカ 松も

道もなく コカ 春ハ コカ たる コカ
同上
シツカニ
○小謡
 立 コカ 方 コカ 入 コカ れ コカ ば コカ 深 コカ 山 コカ 多 コカ あり コカ 楳 コカ 下
 かる コカ 白 コカ 雲 コカ の コカ ち コカ り コカ とも コカ 入 コカ へ コカ 面 コカ 白 コカ や コカ
 松 コカ 風 コカ も コカ 匂 コカ ひ コカ 枕 コカ よ コカ 花 コカ 散 コカ ち コカ て コカ され コカ と
 を コカ くり コカ に コカ 白 コカ 雲 コカ ね コカ 美 コカ 香 コカ 而 コカ 白 コカ 花 コカ 多 コカ 也
 小 コカ 那 コカ 小 コカ 那 コカ れ コカ ば コカ 湖 コカ の コカ 志 コカ 賀 コカ 幸 コカ 候 コカ の

正所松の影ひなるよの残
東よ白の有難や石山の観世を
湫田の長橋の軒人乃強面き今
から例なるべし かくて都れ
意き時へは案の庵りに志を
とむき友もたなれば 便りなるの

杖ますぐり 於渚よかて物をとよ
と増ぬ時 後の関寺ふぬり
いかにふ町 扱今も方を詠ゆき
これ古の百家仙洞の交りたるし
時を事よよそして 歌をよ詠ぐが
今ハ花をくた 穂よか初めておれ

かき家者極小て其母世よ存命者
斗りにてコカ 實を道理あり。
帝より憐みのあをとり下されては
その思コカは 帝より憐みの
あをとり下されてはあをとり下されては
を眼上みて文字もたふらんくらげは

まよておぼえはかきにしてあかん
あいらばあふくあかん コカ いはも
あいらにたがひは コカ あまの上
あまシカれらん コカ あまの上
昔にかきら縁ど コカ あだれの
肉ユカやあ コカ あまのあや

悲しやあな流きを汲で氷上我
正すこまれどお縁へを思われど
又やあぬ時に恐れなり所詮この
是をまた一字にしてやあら

不思後の事をも物うかそれか
三十一字を連絡てなふ心のたらぬ

歌もあるに一字の是かか事
是もねえの故やらんやそと
いふ文字こそ是かかなれ
いふ文字と六揃いふ
帝の歌を詠吟せよと
不慮なうらも若上て

カク

歌吟上
カク

七

あつりし昔はかたから終どかへ玉巻
の肉を床へ敷きしれはらそらうちや
やうしたを引のけて内ぞ床したと
候時ふ所が詠たる也おあわれ
さて古もかゝる例の者やらん
なふ豎物ぞといふ事ハステル柄 聖カレ上 志の

10 議
衆のあはれやうなる帝の心おを
棄ててよむ時の天の恐れも
いふあらん。おあの方ならバ神も
ゆるしたるもせぬ事らばして
言信よ交はるといふるやうに
徳とやククリ上 史秋の極を

尋ぬらして長歌短歌旋頭哥打句
 飛流混本方鶴鶴也一廻文歌
 なり本上カ就中あらむと下といふ事
 庵七ふ一川のちりり 具名を
 鶴鶴といへば人のいふを尋ふと交て
 即ちおのが鶴りといへば何ぞといふた

何ぞと答ふ鶴鶴のちりり如くふ方の
 也亦も如の如くなれば何らむと下
 とやなり一実や歌の振流るに
 は亦古への如くもさうはうなまは
 されが来一方の代は集めのお人の
 生多く者中に今うの小町の妙ある

母の愛好を尋ね横をくせよあるよて
時弱とと詠と我の家この書を傳
ふも記しを後へり
私方の
小所を教を
そなたとよの例ふ列のころ
我あぐらひ負人の容もせよ務を

多情のむと能られ桃花を帯
柳髪月ふたをやうなりは京華
動き清り梨をへるのそ成りうと
今憶懐とおちぬきてん底悲求
まら小町ぞ長成るる
しらに小町
業平をけあまの法樂はあを

よまかひりくしん 心持やんや 物ま

おと業平玉津崎ふまうはらと
^{しら}ゆき 我も同くまらんと
^上 於まよいぬまをまめく稲そ山
^{ウズ} 葛葉の里も浦近く 松方吹上よ
^{一指子} さーかやま 玉津崎ふまうはら

玉津崎ふまうはら 業平のあまの袖
^ト おめひめぐらら 行ま摺木城まの
^{ヤダ} 将衣ま大紋の袴れそまをま
^ト 風折急がー 是れは ^唄 和光の
^日 光りまは 島 ^ト ぬぐらま袖や
^{ハカリ} 波ぐり ^上 和方の浦ま 汐波れは

かゝるかゝる 日 昔も残して田舎
啼くさるる蛇渡る 下た川名も
よふかや忍び終の 日 月六
あはれ 是ぞい 日 上 積れ人の
を成物を 日 上 後よまた光り此
船の時人我待ぬ習ひと白波の

あら恋の昔も家 日 上 期てい日も
昔は候よいらといひくは家
船よ海り先れを 日 上 小町も今うハ
是もめで成と 日 杖ぶささうりて
よあくとたまらふれはく神あ
涙立別きゆく神の海も御寺は

高野山の僧都へ上る道すがら攝津の國阿部野の松原のほとりに到りしに一人の老いたる乞食の女朽たる卒都婆に腰を下して憇ひけるを見れば僧は佛体を象りたる卒都婆に腰掛けるとは勿体なし餘所にて休み給へと諭せば乞食の老女佛説などのべて屈せず互に問答するうち僧は却つて説伏せられその悟れる事の深きに感じ尊き乞食かなとて三禮しその名を問ふに我こそ小野の小町のなれの果なりと名のり昔の驕慢今の落魄など語るうち心狂はしくなり深草の少將の怨念に憑かれて小町が許に九十九夜を通ひたる様を見せ残る一夜をまたて失せし怨みを述べ小町も少將を死せしめたるを悔いる心あり後世を願ひ遂に佛果を得しとなり。

卒都婆小町

梗概 (所) 攝津

(季) 九月

高野山の僧都へ上る道すがら攝津の國阿部野の松原のほとりに到りしに一人の老いたる乞食の女朽たる卒都婆に腰を下して憇ひけるを見れば僧は佛体を象りたる卒都婆に腰掛けるとは勿体なし餘所にて休み給へと諭せば乞食の老女佛説などのべて屈せず互に問答するうち僧は却つて説伏せられその悟れる事の深きに感じ尊き乞食かなとて三禮しその名を問ふに我こそ小野の小町のなれの果なりと名のり昔の驕慢今の落魄など語るうち心狂はしくなり深草の少將の怨念に憑かれて小町が許に九十九夜を通ひたる様を見せ残る一夜をまたて失せし怨みを述べ小町も少將を死せしめたるを悔いる心あり後世を願ひ遂に佛果を得しとなり。

卒都婆小町(三四番目)

役別	装束附
シテ 小野小町	面老女 姥髪 髪受帯 着付箔 腰巻 縫箔 水衣 笠 (物着ニテ黒風折 長柄扇)
ワキ 高野山僧	角帽子 着付無地鬘斗目 水着 腰帯 数珠 扇
ワキフレ 従僧	ワキ同装

作物杖

卒塔婆小町

連死
以上

山浅き小徳れ家のく深き
 心かろらん 是の高野山
 沙門ふての遠佛冥社系諸の為
 唯今於上り小 上まの佛の既
 去り後佛がいよご世よあぞぞ

二人
爰の中チウケンに居るニ生シかまシして何ナニも観ミて思シふ
べしニ遍タマくタマ更カ難ガた人ニがタ城シをシ遊ユ羅キ
如來の教法ニはシ遊ユ車ニをシぞシ悟トりの
種シちシるニとシ思シふニもシむニくニなるニ事ノの
衣ニはシ身ニをシなシしてカ上ニ生シれニぬニ前ニ此
所ニをシ志シきニべシくニ憐ニむニべシたニ親ノも

なニ親ノのニあシをシれニたニ我ニ為シふニんニをシ
とシむニるニ子ノもシあシキニ子ノ里ニをシ行シむニ
をシうシらシにシ野ノはシあシ山ノはシ泊シるニをシ
實ニ於シらシ身ノのニおシるニあシくニ
爰ニのニ程ノはシさシふニやシのニ如シ神ノのニ如シ
とシやシやシふニあシひシつシふニ將シ日ノ毎ノやシとシ

夕ツキのカミ言コト 月ツキ清スミきよクハなるチあキくク行ユク
く 雲クモ井イ百ヒャク愛アイやヤ大ダイ内ナイ山サンのノ
山ヤマ守モリよヨかカらラ其ソノ花ハナやヤよヨもモ知チらラめメ
本ホ懐ナシきキてテよヨしシもモやヤもモ羽ウのノ意イ塚ツカ
秋アキのノ山ヤマ月ツキ桂ケイのノ瀨セ舟フネ漕ソウりリ人ヒトのノ
海ウミやヤらラんン 飯イハりリにニ苦クらラ

ハハ履フミぶフをヲ成ナ朽クよヨもモ腰ウシをヲかカひヒて
休ユまマたタやヤとト思オモひヒなナもモ成ナ
乞コ丐ウ人ヒトがガ鏡カガミをヲあアらラ淺シかカらラとト
表ウラへヘてテはハ物モノをヲあアやヤあアらラ無ムいイらラ六
卒ソツ塔トウ婆ハにニてテはハはハたタをヲあアらラあアらラとト
退ヒきキとト思オモひヒなナもモ成ナらラとト思オモひヒなナもモ成ナらラとト

いふは成と云ふ人。たゞこの縁起
たるは、亦くも佛性徳性、卒塔婆
ふていふ起り。そこは返た飯のふよ
体と云ふ。佛性徳性のふよ
と云ふは、たゞに文字と云ふ
刻めるが、いふもな。時朽れと云ふ

足され 上 だといひ深山の朽れ
成とも花咲きし木は隠れあり。
況や佛性は刻める木なごころを發
かふるべき 我も朽れた埋まき
なれども心のおよむ者へまじ向ふ
あどらならさらん。ねんがたるべき

謂いふ^{連綴} 史卒塔婆安へ全別

薩埵飯^{サツ}子^コが^カ修^{シュ}して^シ之^ノ摩^マ耶^ヤ散^{サン}を

行^{コト}ひ^ヒ弦^{ケン}ふ^フ 行^{コト}ひ^ヒを^ヲ修^{シュ}る^ル散^{サン}ち^チい^イふ

^{コト}地^チ水^{スイ}火^カ月^{ツキ}空^{カラ} 五^イ種^{シュ}又^{マタ}備^ビ人^ニの^ノ辨^{ベン}

何^{ナニ}し^シふ^フ備^ビて^テの^ノ方^{カタ}ぎ^ギぞ^ゾ ^{連綴} か^カこ^コち^チの

ま^マは^ハ感^{カン}を^ヲ修^{シュ}る^ルも^モ心^{ココロ}切^キ徳^{トク}の^ノ修^{シュ}る^ルべ^ベし

と^ト 扱^{アツ}そ^ソと^トけ^ケの^ノ切^キ徳^{トク}い^イふ^フ ^{コト}一^{イツ}見^{ケン}

卒^{ソツ}塔^{トク}婆^パ安^{アン}離^リ二^ニ惡^{アク}道^{ダウ} ^{コト}一^{イツ}心^{シン}

教^{コウ}起^キ善^{ゼン}提^{テイ}心^{シン}是^シも^モい^イふ^フで^デり^リ劣^{レツ}る^ルべ^ベし

^カ善^{ゼン}提^{テイ}心^{シン}あ^アら^ラぶ^ブな^ナと^ト善^{ゼン}又^{マタ}世^セと^トを^ヲ

厭^{イハ}ぬ^ヌぞ ^{コト}此^{コノ}女^メが^ガ世^セと^トを^ヲい^イふ^フと^トを^ヲ修^{シュ}る^ル

心^{ココロ}我^ガい^イふ^フ ^{コト}心^{ココロ}善^{ゼン}提^{テイ}心^{シン}あ^アら^ラぶ^ブな^ナれ^レが

善

善

我佛我とべからざらん

仙將と志きばくそ平塔婆よ

近付連名くれ けらぶかど礼ライをも

為さで交たらそ 述スもぬさる

平塔婆我も休む苦スしひス

まハ暇上縁上をも河生下たり 逆縁下

なつと浮ミぶミくミ 提波女連名が悪ミも

親ミ者の慈悲コ 槃持コがあるミ悪ミも

文珠の智慧連名 悪ミといふ付テも

怒ミなりコ 煩惱コといふミも 業ミ提ミ

かま連名 業ミ提ミもミ 樹ウふエ花キもア

明鏡コやキもヤ 暮ハふテかナ 日上上上 花上も上

本末一物を此時の佛も凡生も隔
なく上本より惡魔の凡生と
救をん為の方便に深き
誓ひの氣をまきば逆縁なりと深き
重しと怒りせし穢し憎むる
非人なりとして僧の頭を地ふ付て

三度氣あつて我の力を得
於戲まの身なよむ阿闍梨極樂の内
ならば我を愛うらめそとは何れ
若し死むらば此僧の教化や
近頃心ある乞食人
にぞや古の名を尋ねやと思ひ

阿闍梨

いふとばら人古人の名を名おぼし。
途を歩ふていふらむとて
縁哉とよくはさるゆゑ飛々作
名ふゆへー 是は出羽の郡司。
小野の良実が娘をのこ母がなれる
果にさへはふらり 果にさへはふらり

小町いも古人の優女にして花の容
けやれ桂の枝をまうして白粉を
後さぐ 羅漢の衣多うして
桂殿のつらふ解りてそり
たては家名をなす 名おぼし
志のぶらひとなす 志のぶらひ

unaru

し

心裁を以てしるは浪の髪を
たみ日 彩雲は翠峯あぐ家
如し 暁暁との言有極
日 芙蓉の曉の波は浮ぶ異ならん
よを詠詩を作り 酔を勤む
香を月袖不静なり かな

日 上 優なる有極の川を程より
からべよの髪を冠を婢始たり
髪も膚よかききて華乱
宛轉言双蛾もきぶの髪を失ふ
百年よ 一と髪たらぬ九十九髪
髪思ひ有明の形を髪髪

首ロギも無上きる感ニにコしク成コ物トを入き
たコぞト 上ト 今ニ 知ラ 存ト とも
何ノ 乳ヲ 枝モ んト 粟ノ 豆ノ 餠ヲ 也
袋ヲ 入シ 持シ ますヤ 後ニ 負ヘ 入ル
ぬク ろヨ 入ル 垢ノ 膩ノ あラ ばト 事ヲ 家
衣アリ 碓ト 掛シ たらシ 碓ト 入ル にはヤ
アジカ

白ク 黒ク の 田ヲ 鳥ノ 子ヲ 何リ ヤア 日ハ 破キ 甚キ 甚キ
破キ 甚キ 甚キ 面ヲ ぞラ りモ 陽ニ 照シ 輝バ
下ト 今ニ 踏ミ 踏ミ 下ト 今ニ 踏ミ 踏ミ 下ト 今ニ 踏ミ 踏ミ
抑ミ 下ト 今ニ 踏ミ 踏ミ 下ト 今ニ 踏ミ 踏ミ
今ニ 踏ミ 踏ミ 下ト 今ニ 踏ミ 踏ミ
物ヲ ぞコ 下ト 今ニ 踏ミ 踏ミ 下ト 今ニ 踏ミ 踏ミ

狂乱の心付て声愛のきくから
なふりのたぐあふも僧なふ
何ぶぞ お僧あふ小町が件
をどうふよ ねと社小町よ何とて
現な起事せとびきりぞ いや
小町といふ人の知りふ交が深うて

何かこの玉き京はすの文書なれて
梅も五月雨の空言なつた一度の
怒りもなうて 今百年はあつた
報あつたらん人恋しや
人恋しいといふね 今といふ成者の
付添はるぞ 小町よ心を無

人の多いよあふ中にも思ひ深草の
四位のお将の 日上 恨の救れめぐり
きて車の揚も毎らん日いつ何時ぞ
冬月こそ友よ逢ひ路の冥ぢ
有ともとほるよごやがまん おと
改上付 守あつた留もあつた出さむ

浄衣の袴がいきて 日上 日 ヤテ
立烏帽子をかざり将衣の袖を
お被いて人目よあぶれ逢ひ路の
月よもゆく雲にもゆくあつた
月の夜もなれあふの時あを深し
同上 軒に玉水とくくと 日 流てはゆり

帰るていふは二夜三夜四夜
七夜八夜九夜といふの何れも
常會ふも逢つてをみるを
時をわくを曉の揚のまじり
百敷といふは九十九敷よ
成るう あら苦い眩いや胸

昔もやと悲しむに
死したるし深草のむす
怨むが附そひくかやう
ねはるるそや
後の世を影ふぞ
塔とすねては

小町
花を佛ぶらゝむ
宵の怪りのふ
なま

関寺小町

梗概

(所)近江國関寺

(季)七月

小野の小町関寺の山陰に庵を結びて佗びしく住みけり七月七日七夕祭の日所の僧稚兒を伴ひて庵を訪ひ歌の物語りを聞かせて給はれと乞ふ小町乃ち僧の切なる請を容れて懇に歌道につき物語りぬかくて僧は小町に今宵の七夕迎へに來り給へと誘ひしが小町は身を恥ぢて應せざりしが僧達強いて伴ひて寺に連れ帰りぬ折しも七夕祭とて絲竹管絃をなして祭りを賑はせ童舞など盛んなりければ小町もそらに昔に返り足手のさはきも心ならず足腰もよろめき乍らも舞ひをなして昔を思ひびたすら憧れの態にてありしが初秋の短夜ならばあさまにもならぬうちにと小町は杖にすがりて我が庵へと帰りゆきけりと。

関寺小町(三番目)

役別	装束附
シテ小野小町	面老女 姥髪 髪帯 着付箔 腰巻 縫箔 腰帯 色無唐織壺折 扇
子方関寺種見	着付箔 白大口 長絹 腰帯 扇 髪スヘラカシ 金平元結
ワキ関寺僧	銀入角帽子 着付白鼓(又小格子) 白大口 紅葉水衣 腰帯 小刀 数珠 扇
ワキツレ從僧三人	大口僧

作物 杖 臺屋 短冊 七枚付ル 口傳

関寺小町

起上招記
び身

侍えと今ぞ秋はあふ

星のま向をきくん 是江列

関寺の住侶ふくむ。扱もくふ

七月七日七夕よての程ふ星の糸を

執りつむやと思ひひけ。又け山姥よ

朝きりてふヨ上一チリ種シをシ得シたレをシ求ムむルふ
けいいんびんきん家々夕べの肌ハをシ保シた
ざいちおもいぬよは保たなる花のあめ
るさふ依て紅井ままさにおびさり
柳ハ風ヲ欺キまきて緑漸ク垂レたり
人ハ又ハ若クたらなし終ハまきの夢

の百轉リは春の来れた者のうらい
秋ハなしまさし一方をあらわすく

コ免カい月を女の百りゆり

や人の心入らずや眼眩を心をて
人の心付給ふも知らず誰にと
あいはれど是にけ園寺の何とに

住者にてゆるぎを女の心事承及び。
お縁しむい極うまとよみ弁ぬやぶたて。
児なきとこそ心あふくこい。 いとよハ
思ひもあらぬ事越ゆぬの物家。
花の蔭穂よあまのたまにも花を。
心を極うまとよし言葉のむも香かよ

漆しよぶななら其月を得とらん。
優うくも雅みやき心よ好こ好こ物家
先ま人の歌うたびハ。強波津のあを
以てま習まふ人の始はめにもままくハ
やらん いま いま いま いま いま
いだが文字の数をすまのらら。 ス ナ ホ 直

Amikura

ふして事のかゝり縁かけらし。
人の代と成て日出度世嗣と縁こ
定じ故よ。難波津の舟と歌びひよ
又浅香山の舟ハ大君の清む我
あしきし。そり又目か度あよあよ
實能むは縁ひつひの二の舟と

父母とついであまの始と成て
上 今も縁あ人もも分す 於於
を國の都人や 我よあまの
慶人とも 好けるよを江の海に
日上 比波の渡のまゆらふもいよ
小謠 く

和歌集

七

春柳のふゆごとく松の葉はあかぬ
種はひと思しめせたといひ時後り
車とらたけ家の又家何らるるの
臨もそとせせじやあはれ泣もそとせ
古き教人多くといふも女のあは
稀はゆふを女の心事歎ひ少なく

つぎゆへ我脊子うき来どもあはななり
はぐふの蝶の振やまじう解て知しも
是の女のおどろきして是の衣を姫の
お芳にしては衣を姫とて公は恭天白皇の
后ふく渡らぬを寝ふらこの如く妻も
その月とてそと学びゆへつぎわいてい

衣通姫の流と心流はく近幸の波下
小野のふ町こそ衣通姫の流と成り
及びて心流ぬまき身をそ浮の根を
絶え誘ふ水あらばいあんぞ思ふ
是ふ町がまがらうそそれ大江の
惟明が心流ぬまき時世は申物な

かふふ衣通の康秀がこころのま
こ成て下りし時田舎者ふんを
愈めよかして我を誘ひし程ふ
詠あるまふ也忘まきて年を
強し物をもて涙のあふまふ
然る悲しきものな

衣通

下

今のまゝ小冊が家にいゝらぬをぬり

^し実を忘れてゐる小冊が奇にさく

^つ不意に後家小冊が物借し後ぬれぬ

教へづら縁こりともあはれ涙よ

咽ぶきり又衣を姫の流し夢へも

小冊なり実年月を考ふは小冊の

まゝお及ぶといふはぬと小冊の

かづらふるをいふは世ふ者なり

年なり今へ教ひ不意もなす

ふや小冊の果ぞとよ^上はのま

争ひ強きそとよい^上や小冊の

恨くや笑ふとて徒縁し物を

Handwritten mark

梅ろふ物に世に申の^日人^上
心のもやんある^ヤ初^ハく^ハ後ぬき^ハ
身を世の根を^ニ結^スく^ニさ^ハそ^ハ氷^ニ
何ら^ハ今も^ハした^ハん^ハぞ^ハ思^ハふ^ハ初^ハく^ハ
実^ハや^ハ包^ハめ^ハた^ハ袖^ハふ^ハた^ハ海^ハら^ハぬ^ハ白^ハ玉^ハ
人^ハと^ハぬ^ハ目^ハの^ハ涙^ハは^ハぬ^ハふる^ハこと^ハを^ハ

の^ハ思^ハひ^ハ草^ハ花^ハを^ハ凋^ハれ^ハる^ハ身^ハの^ハ
果^ハと^ハ何^ハ白^ハ露^ハの^ハ名^ハ跡^ハか^ハら^ハん^ハ
思^ハひ^ハ川^ハぬ^ハき^ハた^ハや^ハ人^ハの^ハこ^ハは^ハら^ハん^ハ
録^ハも^ハ今^ハの^ハ身^ハの^ハよ^ハは^ハ存^ハ命^ハき^ハぬ^ハる^ハ
年月^ハを^ハ送^ハり^ハ送^ハり^ハて^ハ春^ハ秋^ハの^ハ病^ハ性^ハ
糸^ハ米^ハの^ハこ^ハ草^ハを^ハ後^ハに^ハ虫^ハの^ハま^ハも

梅

と

戸ふ水晶をばらねつゝ響響
屬車れ玉絹の文を飾りて
枕はぐ嬢屋の内やうてふ花の
孫の甘園の起外なりし身あまき
今埴生のこやまを愛し床がらん
関寺は陸の産 諸公を常と

聞なれどもを身に益とならば
河ふ坂の山月れ是を滅法の程り
とも得ばこそ花をある葉の折ふ
まける道とて草のすな硯を列
つ筆を添てまゝ草がくや
玄のきも枯らば衰なるやうにて

多向の救も多々の武の系行は惣々
かぐらへる香乃 香と多んぐらを
帝舞の袖ぞ面白丸 上早を
なり 下は 上年侍ちて
多ふと 上は 下七夕の 上ぬる
救の救ぞすくまかりを

から面白の香を舞の袖を傳し
みそのの香をそ五のうへへ
是は七夕たよ向かきべ七か
ふてや有べた 上を 下ハ 上舞
百年の 上も 下舞 上の舞 下
衰なり 上を 下の 上た 下枝

Shirubun

Shirubun

袖もなれ 裳も弱く
 たよふ波の 立寄る袖も翻しを
 とも昔の返る袖のつらば我であら
 夢の古くやかみ 去程よく
 初秋のみづら敷 ちや明方の
 関寺のうね ちよも志切りに

告渡る東雲 何れもこもなすらば
 ちよの表れ 木陰も
 よもつらぐ 喉かてぬるとて杖ぶ
 ちがりてよまろくと本の葉巻をよ
 ぬりもりの百とせの姥とあまへ
 小町が糸は名なりあつし

13

13

檜垣

梗概 (所) 肥後國岩戸

(季) 八月

肥後の國岩戸山に三年以来山居する僧あり。僧は岩戸の觀音を信仰しまた此の地の美景を楽しみ居けるが毎日開伽の水を捧げ来る百年に近き老女ありけり。僧不審に思ひ一日その名を尋ねしに「年経れば我が黒髪も白川のみつは汲むまで老いにけるかな」と後撰集にあるこそ我が詠みし歌なりと答ふされば其昔大宰府に檜垣しつらへて住みし白拍子後に白川の邊にて果てしと聞きしがその靈なるかと言へば老女は藤原興範に水を乞はれし時の事を語りそのしるしを見たく思し召さば白川辺にて我が跡弔ひ給へとて失せけり僧乃ち白川に到り讀經してあれは老女再び現れいたく喜びの氣色にて古へ水を汲み舞をまひし様をまなびて見せなほよく弔ひたまはれと乞ひて帰り失せけり。

檜垣 (三番目)

ワ キ 僧	後 シ テ 老 女 ノ 靈	シ テ 老 女	役 別
数珠 扇	角帽子 着付無地尉斗目 水衣 腰帶	腰帶 長絹 扇	装束 附 面姥(老女ニモ) 姥髪 髪帶 着付摺箔 色無唐織着流 扇 水桶 面前同姥髪 髪帶 着付摺箔 色大口

作物 藁屋(檜垣ノケル)杖

檜垣

是六肥後の洞岩とてといふ所よ
 山岳止る傍ふくむ。扱もけ岩産の
 観世寺に。老女發跡傍の事なれば。
 志づらく。氣乾く。所の地系とて。に。
 南西の海を。渡りて。方戸の。

ヨ下

中なり。人稀にして慰も多く。致系
有る。郷里を去る。誠は任る。此
所と思ひ。二年の間。居住はてり。
爰は又百も。及ぶらん。と。学了。此
を。女。毎日。つら。の。水。を。汲。ぐ。事。あり。け。
を。ふ。も。来。り。て。ゆ。り。い。つ。な。る。者。ぞ。

名を尋ねたやと思ひけ

新白シラガの氷汲シラガは月ツキも夜ヨや
傳ツトふらん。史シ記キあるコトも。又マタ是コトをシ聞クく。
帰カエるコトをシ思シふコトも。又マタ是コトをシ聞クく。
貧ヒナシ家カのシ物モノ知チ少ウチあリ。錢カネもシなク。
故コト人ト疎スく。をシ悻シ然シとシ形カタもシなク。

霧令極まりて雲霧は似たり
流る水のありれ世の其のつらさを
汲て去る爰所も白河のく
水は深きを深と浮むやまると
捨人は仕遇とさるる雲の山下
庵のふとにたり山下庵のふとにたり

をよみ又は水あびてあつては

毎日のをれ歩て城は方々をう

そとく 煮てかう極の事にしては

少一の深きと道はくたせうらん

流る水はひらひらとあつては

あつてはひらひらとあつては
誓日。

白河の巻とて名なきはし かな
名なき巻とて名なき 中の巻の事
そと思ひもあらぬ事を作は物な。
かの後撰集のあふ年ふれはつが
黒髪も白川のいづいづむとてまよ
きりうあとい。録ももまあが款あり。

昔は飛前の老宰相有ま。唐りに捨垣
志はらひい。後に白拍子。後の巻
け白の外のは。後に也。実の巻
事のなり。その白河は唐りの
何の巻。 後原の具は犯あり
後に時水や。何の巻。後には。後には。

勢をばらん 後 何ら俸をしの
ぶ者極やを今も執心の水を汲む
輪回の婆よ是之給ふぞや 何ら
痛らや 上 我熱心は舞女の
卷せよ務きこと深深き二瀬川
熱痰の桶を舂ひ 猛火の灼瓶を

搥てけ水を汲むを水湯と成る
我牙を焼く事俦をあねだけ 後
湯の徳遇ぶ引きて灼瓶あれば
猛火にかゝり 上 さくらば岡果の水を
汲む其瓶を極り捨て 後 浮む
給ふべし 上 してはくらば湯の

為よげいかけ氷を汲乾さば環もや
浅く成りたと思ひも深き小取衣の
袂の落れおごまき丸 新白河の
月乃取よ 底をむ氷を
今汲ん 仰 狗籠の水は新あそ
たもとを月や上ららん 上 下
クリ上
ホカケ
サレ

残星の晁カサよ小溪の水を汲む
後取の燭カサよ南窓のはれを焚く
氷カサがふよりかて氷よつも寒く
青き事並カサよりかて並カサより深し
本の其カサ又カサ乃カサれ報カサい者カサ今カサの昔カサしむ
去カサもせで 跡カサ増カサりさカサら思カサひの笑カサ

日
 紅井の波よ身を焦らす合下釣籠の
 然縄縹せし其た古くも紅むれ
 春の朝曇る秋は夕暮も一日の
 夏とよや成ぬ紅顔のよそ目ひ
 翁女の巻もいと素てはも夕く虹
 紅顔の北羽髪女のうづらたをとき

桂の眉もあかりて水は梅の面影
 を垂るげ沈んぞ髪に見えへ
 黒髪は水のもく川菘菜の髪り
 きろ月の有極ぞ悲しくた空や
 古と残思ひかきば懐くも其
 白川の波りきしヤア友原の真影の

山
まを古の白拍子今うささと有り
かた昔れおの袖しよさらも
あさ衣纏き袖を返しぬれど
はら地陸奥のくふの細布狗合は
何とら白拍子その面影の何るは
中
よしくまとも昔よ別し舞

かき海をぐも今うけよまごと
上
真範頻りふまごむ
は
浅る
ながら麻の神落お拂ひぬか
上
檜垣の女は
口傳
身の果をて序の舞
上
水運ぶ釣籠の縄乃はるぐのあを
縁りく
上
昔よはれ白河の波

山

山



伯母棄

梗概

(所)信濃國缺捨山

(季)八月

陸奥信夫の某信濃の國缺捨山に到り月を賞せんとして待つ處に一人の老女出で来り
 今宵の月は面白かるべしといひ猶某の間ふにまかせて、昔の缺捨の古跡など教
 へてありしが優しき某の心に愛でて月と共に再び現はれ旅情を慰め申すべし
 とて木陰に消え失せたりかくて月出て満山を照り下せば老女の姿再びあらは
 れ我が身の上を物語り月をたゞへ舞をまひなどしけるが夜も明け方になりたれ
 ば某は山より帰り行けば老女は今もまた捨てられたる如く淋しく残りやがて姿
 は何處ともなく消え失せけりと。

伯母稟 (三番目)

役別	装束	附
シテ里女	面曲見 髻髪 髻髪帯 着付箔	色無唐織着流
後シテ老女	面老女 (瘦女ニモ) 髻髪 髻髪帯 着付箔	
ワキ都ノ人	白大口 腰帯 白長絹 扇	着付段髪斗目 素袍上下 小刀 扇
ワキツレ 役者二人	ワキ同装	

作物 杖

伯母捨

マシ
連三人
ヨ上
不身

月の名もたらせ秋あはやく
 姨捨山よ急がん 是ハ陸奥
 信まの何某にてハ我ハ程ハ却よ
 叶ひく洛陽の名不旧跡一ツんがてハ
 是より小陸道よかアハる光寺ふ

あり秋のまは折よなきぞくは程よ。
承り及びひさる姨捨山よより月を
眺めばやと思ひひのコノ人コノけ程の志を
旅居のかり枕カ又まか
申宿の暇シ書シて行カるカふカ
程なく愛ぞコノ文科カや姨捨山よ

著コノふコノくコノくコノ 我コノはコノ山コノよコノて
見れば山コノ程コノ人コノ家コノのコノふコノくコノく。
萬里の空目コノ前コノよコノるコノ近コノくコノ月の
さコノ我コノと思コノひコノやコノらコノ今コノ宵コノのコノ空コノれ
いコノ川コノよコノふコノ程コノ待コノがコノぬコノるコノかコノ地コノして
心コノそコノらコノ成コノおコノうコノらコノうコノあコノあコノらコノ面コノ白コノや

けはるきくして月を眺む古々の物語よ
せむやと思ひししつ女 潤子押 呼カケなましく
旅人何とてけよの体らひ給ふぞ
不コト思儀やまの早サ本の後も更もきて
山路もぬる方よのとも女性一人きり
は。我は洞とかがるぞやいづなる人

にこほしものぞいそ 是のける史料の
里よ信者成が。今日の日けり又秋のよ。
昔のよとまぐ月の名れら給ふを
空のよまふ 雲も収まるる夕日影の
珠よ照流ふ天のよ思なれ空乃
空まふ那いふ今宵の月れ面白

からんむらん ^{コカ} 扱ハけハ置人ハにキ
海ハまハらハやハ承ハ及ハびハもハ姨ハ捨ハ山ハのハ
その跡ハいハばハくハのハ程ハあハくハゆハぞ

^{コカ} 姨ハ捨ハ山ハのハ生ハ跡ハとハ同ハせハあハくハ心ハ得ハぞ
^{コカ} 我ハ心ハ慰ハめハらハ稱ハいハるハ又ハ科ハやハ姨ハ捨ハ山ハよ
嗚ハ月ハをハこハとハとハ詠ハめハ一ハ人ハのハ跡ハなハらハば

あれハ目ハ見ハへハたらハ桂ハのハみハれハ後ハ我ハ
昔ハのハ姨ハ捨ハれハとハのハ七ハ跡ハよハそハゆハへハよハ
^{コカ} 扱ハけハ木ハのハ葉ハをハいハてハ捨ハてハ置ハれハよハ
昔ハれハ人ハ乃ハ ^{コカ} 生ハ徒ハ中ハ小ハ埋ハをハ草ハ
仮ハならハ世ハとハてハ今ハいハふハ ^{コカ} 昔ハ終ハよハ
かハりハ一ハ人ハのハ形ハ飛ハびハやハ残ハりハをハん

相凄まじたは東の月も身ぶ
志む 秋の心 は上 今もても慰め
か福川史料や カ 姨捨山の
夕暮ふ松も桂もほづる木の緑も
残りて秋の暮ふれや チ 夕暮ふれ
為者かとも エ 渡り月 ハ 冷しく キ 雲を ト 曇りて

淋しい山の暮も チ 夕暮ふれ
いふ人 コ の身 ハ の何 カ 玉より チ 朱り
花 ハ ぞ コ 是 ハ 花 ハ の コ 花 ハ の 者
に コ ぐ ハ ぐ ハ 承 ハ 及 ハ び ハ 花 ハ あり ハ 花 ハ ぞ
今 ハ 宵 ハ の 花 ハ 月 ハ の 花 ハ 子 ハ 花 ハ の 花 ハ 子 ハ 花 ハ 子
時 ハ 節 ハ に ハ 花 ハ 月 ハ を ハ 見 ハ ん ハ と ハ 花 ハ 子

来つてなま 後への藤人なま。
実心ある事とて名不の月を
が流せんや。法何らだ我も月と
ともに歌いなきか。藤人の歌を
蟹女とて。そのや歌を蟹女
んといふ身ま川くふ住人ぞ

妾むう〜文科の者 依今又
何方ふ 梅といをもんがけ山の
名ふおひき ちまを控乃
夫といをもんも物く〜その
左も控らきて 時をとりけ山よ
まむ月名秋毎よ物心の事を

晴きんといふ今宵秋意あつと
夕陰の赤れ本に海るとみへて失ふ
きりく中入夕陰もぐる
月影のくまがそめて面白
菊里は空も隈なくしゆく
秋も暮るもたむしんで終秋

^{ツ中}二お取中の新月は幾千里の赤れ
故人の心上遠き面白の秋はあ
く上明く又秋のまよひぬ
今宵の月れ惜きのこゝろはあ
なよ秋待が縁と歎ひなまを
る月のみたなもお不えぬ程

姨捨の山を女が住跡の
月の友人宿居して 草刈あ
花は起外マト付テ 袖のあは乃
さもあとのあはれ人よ川別添て
現あや盛ハあはれもあはれあ
く草ヤな萎シたれて昔と糸

捨られ程の身をもとらで又姨捨の
山トがく面トをはらしあトの月よ
見ミあも知チくやニ何事トも
あはれ世の中トいハたハねもをハあ
思シひ草クをハあハ月トは添テ明クさん
実キや真マはカれト来リ真マとシて

海にしも今の折うとあらきたる
今宵の空にまゝに起る神
然るも月の名跡いづくあまきと
文科や 姨捨山のまきうなれ
一輪満てる清光の影圓として
海嶠を離る 然るも諸佛の

いびき猪劣なげれた
超世の悲願著たげ 弥陀光明よ
去くにあー 去程は光西ふ
行幸の途をて西方にはまめ
入甘が為とや 月かか如来に
右の根結として 有縁をよとに

片地

下

七五折

丁三六

昭和五年八月五日印刷
昭和五年八月十日發行

著者權所
領不許

昭和
改本
版

訂正者作者
廿三世

金剛右

京
右
京

發行所
發行所
兼
者
檜
常
之
助

東京市神田區錦町二丁目拾番地
合資
會社
檜
書

店
檜
書

京都市二條通麩屋町東北角
檜書店京都出張所

終

